

第48回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) 大会報告

英文学科長 白井 由美子

2023年11月3日、学問や文化に触れるにふさわしいこの日、第48回神戸女学院大学英語英文学会(KCSES)が開催された。この学会は、英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の向上を目的として大学院設置の際に設けられた伝統ある英文学科ならではの学会である。しかし、2024年度4月から文学部英文学科は募集を停止し、国際学部英語学科とグローバル・スタディーズ学科を新設するため、この学会の名称も変わるかもしれないという中で開催となり、今後につながる大きな意味を持つ大会となった。それに応えるかのように、学会発表の中身は大変濃いものであった。構成は、前半が卒業生による研究発表、後半が特別講演。今回はグローバル・スタディーズコースがKCSESの担当で、アジア映画研究者でありインド映画の字幕翻訳家としても各方面でご活躍されている松岡環先生を特別講師としてお招きすることになった。

「“特殊言語”字幕翻訳者になるには」と題してお話し下さった松岡先生。まず特殊言語の定義からご説明下さった。英語、フランス語等のメジャーな欧米言語以外の言語のことを意味する。そのように考えると世界にはいくつの特殊言語が存在するのだろうかと思うのだが、例えばインドの場合、公用語が国レベルから州レベルまであり、さらに細かく分けられているとのこと。よって、これらの特殊言語を映画にする場合は、まず英語の字幕翻訳を作成してから日本語字幕を作り、各言語の専門家からチェックを受けて完成に至る。またその過程には、文化の違いや日本語の敬語、漢字にも注意を払う必要があり、膨大な作業のおかげで映画を楽しむことができている。そのように思うと、大

阪アジア映画祭に神戸女学院大学文学部英文学科として協賛し、上映されるバングラデシュ映画の字幕制作を学生たちが行っている「バングラデシュ映画字幕制作プロジェクト」は、学生にとっては貴重な学びである。さらに松岡先生は、字幕翻訳の仕事についてもお話し下さり、翻訳を学ぶ学生にはよい刺激を与えて頂いた。

前半の研究発表の部では、2014年3月に本学文学部英文学科グローバル・スタディーズコースのBanasickゼミを卒業された森田祐奈氏による「我が国におけるSDGsの深化—関西企業の取り組みを中心に—」を聴いた。企業での実際の様子を知ることのできる興味深い内容であった。

今回もオンライン開催となり画面越しではあったが、発表者、聴衆が一つとなって、気持ちのこもった意義深い学会となった。この学会のためにご協力下さった会員の皆様、教職員、コミュニティーの皆様にも深く感謝申し上げますと共に、皆さまのさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

第48回
神戸女学院大学英語英文学会

開催日時
2023年11月3日(金・祝)
14:00~16:10

開催方法
オンライン (Zoom)

申込み方法
10月30日(月)までに英文学科へメールでお知らせ下さい。
英文学科: e-office@mail.kobe-c.ac.jp

プログラム

I 研究発表 (14:05-14:40)
森田 祐奈 氏
公益財団法人太平洋人材開発センター 監修
本学英文学科グローバル・スタディーズゼミ長、立命館大学 国際関係研究科 修士
我が国におけるSDGs (持続可能な開発目標) の深化
-関西企業の取り組みを中心に-

II 特別講演 (14:45-16:05)
松岡 環 氏
アジア映画研究者・字幕翻訳家

「“特殊言語”字幕翻訳者になるには」
翻訳者登録、フランス語、ドイツ語等メジャーな欧米言語以外の“特殊言語”の一つであるヒンディー語の翻訳者を目指す。日本語、英語は日本人の知るべきな開発目標である。この目標を振り廻り、“特殊言語”から見た日本社会をお伝えいたくと共に、“特殊言語”字幕翻訳者になるためのノウハウについても話をいたします。

お問合せ
神戸女学院大学文学部英文学科事務局
e-office@mail.kobe-c.ac.jp ☎0798-51-8548

特別講演

“特殊言語”字幕翻訳者になるには

松岡 環

(アジア映画研究者)

私はインド映画を始めとするアジア映画の研究を行う傍ら、大学で学んだインドの言語、ヒンディー語の映画を中心に、字幕翻訳の仕事も手がけている。これまで字幕を担当したインド映画には、『ムトゥ 踊るマハラジャ』(1995年)、『きつと、うまくいく』(2009年)、『パッドマン 5億人の女性を救った男』(2018年)等があるが、字幕翻訳者のうち大多数を占めるのは、英語、フランス語、ドイツ語などの欧米諸語が専門の人か、あるいは韓流、華流などブームになった東アジア諸語の字幕翻訳者たちである。映画配給業界では、それ以外の言語は“特殊言語”と呼ばれ、直接字幕が作れる字幕翻訳者は非常に少ない。

そのため、“特殊言語”の映画を公開しようとする配給会社は、まず英語を専門とする字幕翻訳者に英語字幕から日本語字幕を作成してもらい、それを映画で使用されている言語の専門家に“監修”してもらおう、という手順を踏む。“監修”の仕事は、①英語字幕を介したことによる、誤訳や不十分な表現などがいないか、②固有名詞のカタカナ表記が正しいか、という2点を中心に、映画の内容が正しく伝えられているかどうかをチェックするものである。

監修の一例を挙げると、①は英語字幕で「sister」「brother」となっているものを、「姉妹」や「兄弟」のそれぞれどちらかであるか判断したり、「uncle」が「伯父」か「叔父」か、はたまた姻戚関係にない「おじさん」なのかを判断したりする。また②では、シンガポールにあるマレー語の地名「Bedok」は、「ベドック」ではなく「ブドック」と読む、ということ指摘したり(ローマナイズされていても、ローマ字読みしない単語もあるのだ)、日本では「ジャイプール」と誤表記されることの多いインドの地名を「ジャイプル」に訂正したりする。固有名詞の音引きは、ネットで検索しても誤記が多く、「こちらの表記の方が多数派だから」を正誤の判断基準にするのは危険である。

しかしながら、“特殊言語”の数は非常に多く、例えばインド映画の例で言うと、2020年以降に日本で公開、あるいはそれに準ずる形で上映されたインド映画の言語は、ヒンディー語、テルグ語、タミル語、カンナダ語、マラヤーラム語、グジャラート語、ベンガル語と7言語に上っている。このうち、ヒンディー語とベンガル語作品の字幕は、それぞれ原語を習得した字幕翻訳者によって作成されたが、あとの作品は1作を除き、監修者の力を借りて字幕を仕上げている。監修者を見つけられなかったのはグジャラート語の作品で、グジャラート州を専門とする複数の研究者に打診したが、映画の舞台が自分の研究対象地域とは違うため、その地方の方言がわからない、等の理由で断られた。ヒンディー語を習得した字幕翻訳者が担当したため、おそらく間違いはほぼないと思われるが、こんな風に適切な監修者が見つけれない場合もある。

理想を言えば、前述したようなインドの主だった言語は、それぞれ直接字幕を作成できる字幕翻訳者がいてほしいが、テルグ語映画『RRR』(2021年)が日本でも大ヒットしたことでインド映画への関心が高まり、インド映画の字幕翻訳者を目指す人が出てき始めた。“特殊言語”字幕翻訳者に必要とされる条件は、①映画が好きなこと、②英語がある程度できること、③担当する特殊原語を習得し、その国または地域について総合的な基礎知識があること、④不明な点を調べる調査・研究能力があること、⑤日本語の表現能力が高いこと、⑥字幕翻訳者養成学校での受講経験があること、の6つではないかと思う。私自身は⑥を欠いたまま今日まで来たので、失敗も多い。今後、インドの“特殊言語”字幕翻訳者がさらに増えることを願っている次第である。

発表要旨

我が国における SDGs (持続可能な開発目標) の深化 —関西企業の取り組みを中心に—

森田 鮎奈

(公益財団法人太平洋人材交流センター)

本稿は、SDGs (持続可能な開発目標) が採択されたのち、政府や関係機関、企業など様々なステークホルダーがどのようにSDGsと向き合ってきたかを明らかにするものである。数あるSDGsステークホルダーの中でも、特に企業の活動に注目する。企業は今や国際協力に欠かせない強力なアクターといえる。グローバル化が急速に進む中、一部の多国籍企業には1国の国家予算をはるかに超える企業も数多く存在する。地球規模の課題に対応するには、国家だけが取り組むものでは無くなってきている。SDGsはまさに現在を象徴する世界全体の目標だといえる。

本稿は特に関西の企業の製造業に携わる企業の動きに注目した。SDGsが採択されたことで日本社会、特に関西地域で大きな変化を及ぼすムーブメントが生まれたかどうかを、企業が毎年発行している企業報告書やCSRレポート、CSR担当者へのインタビューから考察する。

SDGsは2015年9月に国連で採択された世界共通の持続可能な開発目標である。SDGsの前身であるMDGs (ミレニアム開発目標) では対象地域は開発途上国、特に最貧国であったが、新たに採択されたSDGsは先進国、途上国問わず課題を世界全体で取り組むべきものとし、すべての国を対象としている。加えて、貧困問題の観点からの項目だけではなく、環境問題や社会問題の観点も含まれており、SDGsは包括的にすべての国、地域、分野が対象となりすべての問題を盛り込んだ結果17のゴールと169のターゲットに絞られたといえることができる。

我が国ではSDGsの採択段階から政府を始めとする有識者やNGO、NPOなどの各種団体が積極的に関わり、また採択されたのちもSDGsへの取り組みを国内外広く公表してきた。特に関西では、JICA関西主導による「関西SDGsプラットフォーム」の設立、近畿経済産業局・大阪商工会議所などが連携し設立した「関西SDGs貢献ビジネスネットワーク」

の設立の動きがみられ、全国に先駆けて官民一体となってSDGs達成に取り組むという動きがみられた。大阪商工会議所の担当者へのインタビューによると、SDGs達成に取り組むという概念が関西企業で受け入れられた理由は大阪での万博誘致が大きく関係しており、積極的に取り組む姿勢を国内外にアピールすることで、市民も企業もグローバルマインドを持っているという点が誘致のアピールポイントの一つになりうるという考えとのことだった。

関西企業のSDGsへの取り組みを明らかにするため、国連グローバルコンパクト (UNGC) に参加している企業・団体の動向を企業が発表するCSRレポートなどや企業のホームページなどから調査した。さらに本社を関西に置く企業6社のCSR担当者から直接聞き取り調査を行い、SDGsがどのように企業の中に浸透しているかを聴取した。

聞き取り調査の結果から、個々の企業それぞれSDGsへの取り組み方や速度は異なるが、共通する部分が多く見られた。担当者の多くが「SDGsは共通言語である」という認識を持ち、企業が主体となってSDGsに取り組む必要があると感じ実際に取り組みをはじめている。また経営戦略の中にSDGsを取り込まないという選択のほうがリスクがあるのとらえている企業担当者もいた。一方でSDGsの概念を今後どのように経営と統合させるかが課題であるようだった。さらにこれまでには見られなかった企業の枠組みを超えた有志によるCSR担当者の集まりや勉強会も不定期に開催されている。SDGsは今や企業にとって無視できないもの、主体的に取り組まざるを得ないものであり、今後もさらにSDGsに取り組む企業が増えていくであろうという印象を受けた。

我が国におけるSDGsの浸透は政府、関係機関、企業それぞれの活動により今後もさらに浸透していくものと考えられる。2025年の大阪万博誘致の成功、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催なども、SDGsを一部の人々だけではなく、一般市民に広めるきっかけとなることが期待できる。今後も企業のSDGsへの取り組みが、他人事から自分事へ、SDGsへの共感に一般市民も巻き込むことができる大きなムーブメントの鍵を握っているといえよう。

国際学会発表(会員氏名ABC順)

*別府 恵子 氏

“The Echoing Pan-Pacific –Henry James, Cid Corman, Lindley Williams Hubbell, and Gary Snyder”

同志社大学で開催された第9回国際ヘンリー・ジェイムズ学会(2023年7月5-7日)にて基調講演

*南出 和余 氏

“‘Probashir Bou’ (Migrant’s Wives) in a Rural Bangladesh Village: Waiting and Recreating New Family Lives”

東京外国語大学で開催されたInternational Symposium “Global Youth Dynamics and ‘Reality’ Negotiation in East Africa and South Asia: Gender, Diversity, Agency” (2023年11月18-19日)にて研究発表。

会員による出版紹介(会員氏名ABC順)

◇相本 資子 氏

『女性のための衣装哲学 THE DRESS OF WOMEN』(シャーロット・パーキンズ・ギルマン 著、共訳、小鳥遊書房、2023年12月刊)

◇南出 和余 氏

『ブランド幻想—ファッション業界、光と闇のあいだから』(アリッサ・ハーディ著、相山夏奏訳、明石書店、2023年12月刊) pp. 213-219 (解題)

◇奥本 京子 氏

第V部「平和をめぐる認識と表象」の第8章「平和の主体と行動」(編集委員として立案、調整、編集)、第V部「平和をめぐる認識と表象」の第9章「暴力の文化から平和の文化へ」(編集委員として立案、調整、編集)、第9章「ファッションとストーリーテリング」pp. 600-601 (執筆)、「芸術アプローチによる平和ワーク」pp. 604-605 (執筆) 『平和学事典』(日本平和学会編著、丸善出版、2023年6月20日刊)

◇立石 浩一 氏

“Prominence in a Pitch Language” (Shinobu Mizuguchi and Koichi Tateishi, Lexington Books, June, 2023, 156 pages)

◇吉田 純子 氏

“Disability and Children’s Literature” *The Routledge Companion to Children’s Literature and Culture* (共著) (Routledge, December, 2023) pp. 313-326.

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開始し、今年度も担当教員からの推薦、および自薦による15名の応募を受けつけた。2月に英米文学文化、言語コミュニケーション、応用言語学(通訳・翻訳分野)、グローバル・スタディーズの各部門で選考を行い、最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者を以下の通り決定した。

英米文学文化(応募者3名)

<最優秀賞>

E20041 石濱 侑香

<優秀賞>

E20016 福島 理子

E20067 光畑 舞

言語コミュニケーション(応募者2名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E20086 成田 悠花

E20090 野上 愛純

応用言語学(通訳・翻訳分野)(応募者6名)

<最優秀賞>

E20157 山下 真奈

<優秀賞>

E20069 宮本 綾子

E20081 中村 美香

グローバル・スタディーズ(応募者4名)

<最優秀賞>

E20042 石山 里桜

<優秀賞>

E20092 大饗 茉里奈

記念賞

2023年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

タルカッタ 記念賞 E21029 九鬼 すみれ

デフォレスト 記念賞 E21048 大隅 麻里奈

女性学インスティテュート賞(優秀賞)
E卒業生 胡桃澤 佑衣

キャンパスニュース

<着任>

米川 正子 教授 2024年4月

<訃報>

*元英文学科教授 金城 盛紀 様 が2023年5月4日永眠されました。
天上の平安をお祈り申し上げます。

<新学部新学科開設>

2024年4月、英文学科はその教育内容をより明確に打ち出しさらなる発展を目指すため、文学部から独立し、国際学部英語学科、グローバル・スタディーズ学科として新たに出発いたします。

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)
(2005年 9月22日改訂)
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、本学英文学科長と、本学英文学科教員若干名で構成されるものとする。
(c) 会費の取り扱いは学科会計委員が担当する。

附 則

この規定は、2022年4月1日から施行する。(2022年1月14日改正)

内規

I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、英文学科教授会で審議の上、決定する。

II. 参加費・経費について

- (1) 神戸女学院在職者、在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。遠隔による開催の場合はこの限りではない。
- (2) 郵送費などの経費は、英文学科予算から支出する。
- (3) 参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員と文学部事務室(英文学科)が担当する。

附 則

この内規は、2022年4月1日から施行する。(2022年1月14日改正)



編集後記

今年度もKCSES学会員の皆様には、研究活動、出版のご連絡をいただきありがとうございました。今年度の学会では、国際協力 (SDGs) と特殊言語字幕翻訳という「新たな世界への扉」への造詣を深める貴重な機会となりました。来年度から本学英文学科は国際学部英語学科・グローバル・スタディーズ学科となり、本学会も新たな歩みへと進んでまいります。今後ともどうぞよろしく願いいたします。なお、厚かましいお願いで恐縮ですが、神戸女学院教育振興会にご寄付を頂きます際には、学生たちの研究活動の補助に用いさせて頂きたく、「国際学部学生のために」と一言お書き添えを頂けましたら幸いです。

皆様のご健康と益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

KCSES Newsletter 編集委員

(2023年度運営委員)

(ABC順)

- | | |
|---------|--------------|
| ○古村 敏明 | ○南出 和余 |
| ○白井 由美子 | ○Goran Vaage |

KCSES Newsletter No. 39

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

2024年3月発行